介護新聞2008年12月4日

花凪屋繁盛記

連載5

人と人とがつながって

NPO法人在宅生活支援
サービスホーム花凪
木村美和子理事長

Tさんをどうして好きかというと…

Tさんは毎日、怒り、怒る。むくれる、むくれる。すねる。その繰り返しです。笑うこともありませんでした。初めて大声で笑ったのは、下宿して四カ月ほどたってからでした。

「ありがとう」

と言ってくれたのも、そのころでした。失礼にも、驚きのあまり

「今、ありがとうって言いました？」

と、ご本人に確かめてしまったくらいでした。それほどTさんにとって私がする「介護」というものは、意に染まないものだったようでした。

「花凪」を立ち上げる前年まで、十七年間特養に勤めていた経験があり、認知症高齢者のことは分かったつもりになっていました。なのに、トイレでの排泄、朝起きて日常着に着替えること、食卓について食事をとることなど、さまざまな「一般的」と呼ぶ日常生活をTさんは断固拒否。こうしたら、ああしたらという試みはことごとく、

「しつこいね！」

との言葉とともに鉄拳が飛ぶという結果となって戻ってきました。

このことは私を深く悩ませ、十七年間現場で実践し、積み重ねたものは一体何だったんだろうという自問となりました。

「花凪」の原点となった思いは、「相手としっかり向かい合った支援をしたい」ということでした。それは、施設で働きながら一人ひとりとしっかり向かい合えていなかった自覚であり、そのような余裕の持てない大人数のケアに限界を感じていたからでした。

私がこれまで施設でしてきたことは、その人に合わせることではなく、職員の決めた枠に合わせようとしてきただけなのではないか？　という、反省もしていたはずなのに、また同じ繰り返しをしようとしていたのです。

Tさんは私に屈することなく自己主張し、自分の居場所づくりをしてくれました。まずは見守り、受け入れなさいと教えてくれました。

人の言いなりにならなかった人だから好きで、第一号の下宿人がTさんで良かったという思いは七年たった今でも変わっていません。

下宿人第2号Kさん登場

Tさんと暮らし始めて一カ月たったころ、「長期間居住するところが見つかるまで、Kさんという八十五歳の女性を預かってほしい」という依頼が舞い込みました。

Kさんは娘さんと二人暮らしで、娘さんの在・不在にかかわらず徘徊を繰り返しており、疲れ果てるまで歩き回るため、何度も路上で倒れては交番で保護されていたとのことでした。

依頼から二日後、Kさんは我が家にやってきました。前日、「家族会議」を開いてTさんの了解は取りつけていましたが、どういうことになるのか不安は大ありでした。

予想通り、Kさんは初日から

「家に帰る！」

の一点張り。出て行こうとするKさんを止めようとすると、

「花凪」1号館。ここから『花凪』の事業、活動がスタートした

「おめぇなんか嫌いだ！　どっか行け！」

と、両腕をブンブン振り回し威嚇（いかく）します。「ああ、Tさんが二人になってしまった」と心中溜（た）め息をついても後の祭り。

Kさんの快進撃はトドメを知らずという感じで、朝の五時には「シャー、シャー」という音も高らかに居間のカーテンを開け、宵っ張りでお寝坊の木村一家とTさんを起こしにかかり、それでも起きないTさんの布団をめくろうとします。毎朝のように二人の攻防戦が繰り返されます。あまりに面白いので、好きなようにしていただいていましたが、結果はTさんの全戦全勝でした。

また、Kさんはみんなと一緒に朝食をとろうとしないTさんに我慢がならないと言い、

「おめぇがだらしないから、好き勝手するんだ！」

と私を叱（しか）りますが、当のTさんは知らんぷり。

やっぱり、1人より2人がいい

それでも、働き者のKさんに食器洗いを頼むと、必ず

「さぁ、おめぇも一緒にするぞ」

とTさんに声をかけ、かけられたTさんは嫌がらず洗い物をしていました。何度お願いしても食器をすすがず、台ふきんで食器をふき、ふいた食器は巧妙に冷蔵庫にしまうというのがお二人の流儀でした。どういうやり方であれ、仲良く仕事をしているお二人を見ているのは楽しかったので、細かいことを言うのは止（や）めにしました。

時間がたつにつれ、お二人の関係は姉と妹のようになっていきました。Kさんに反発しながらも甘えを見せるTさん。困ったもんだと言いながらTさんの世話を焼くKさん。

下宿人が増えたことで、確かに気を遣うことも多くなりましたが、いきいきと暮らすお二人を見て「やっぱり、一人より二人になって良かった」と思うようになったのは、Kさんが来てから一カ月ほど後のことでした。